

編集後記

“Pancasila”, 多様性の中の統一。1945年に独立した多民族国家インドネシア共和国における建国の精神である。沸き立つ^{ふたつ}垣^{かき}塙^{ぼり}のようなスカルノハッタ国際空港の喧騒に圧倒されながらGO-JEKの配車アプリで頼んだタクシーでジャカルタ市街に入ると、そこはまるで動く博物館のようである。優雅に走るベントウ車の傍らをガムテープで留めたドアの付いたトヨタ車が騒音を上げながら追い越していく。ミニバスも相変わらず盛況のようだ。

創刊以来17年目となる学部紀要も紆余曲折を経ながら無事に刊行の日を迎えることができたことに感謝しつつ、珠玉の論文・論説およびエッセイを、国際、交流、人権、文化という4つの視点から編集委員の責任において整理させていただいた。個性あふれる魅力的な作品^{たおやか}を^{たおやか}繋ぐ^{たおやか}韋^{たおやか}帯^{たおやか}が存在する精神的風土、それが私たち総合政策学部の『総合政策論集』の世界であり、個々の教員が属する専門領域としての学会誌にはない特質といえるだろう。

大学教育のあり方が問われている現在、画一的・伝統的な教育方法を継承するだけでは真に魅力ある教育方法を創造することができない。それでは、現在の大学教育をいかに変革すれば、グローバル化、高度情報化、少子高齢化などを受容しつつ変転を続ける世界的激流の中、目前の課題に対応しつつ、持続可能な社会の実現に貢献しうる人間を育てられるのだろうか。その問題には、〈貧困→経済成長〉といった従来の画一的な図式で表現されるような単純明快な解決策は存在しえず、これまでの人類史の中で醸成され、洗練が重ねられてきた多様な文化や宗教を包括し、総合しうる複合的な視点が求められていくことになる、と私たちは考えている。

すでにいたるところで^{ほころ}綻^{ほころ}び^{ほころ}の^{ほころ}頭^{ほころ}わ^{ほころ}な^{ほころ}国家という「公」を維持するために、市民に犠牲を強いる不条理な構造によって、「解決策」が新たな、より深刻な問題を引き起こすという悲劇的連鎖反応が生まれている。仮に、その悲劇^{しなやか}を^{しなやか}韋^{しなやか}帯^{しなやか}に^{しなやか}解決しうる新たな文化を創造するために求められる研究・教育を担う学部が存在するなら、その存在意義が高まることは明白ではないだろうか。今回の『総合政策論集』はかかる壮大な課題に対して、各執筆者が自らの立ち位置から巨大な一枚岩の割れ目に嵌め込もうと試みた *Climbing Holds* の一つと考えていただければ幸いである。目前に迫る岩壁は余りにも高く険しい。だが、それが目指す社会へといたる唯一の道であるとなれば、登らないわけにはいかないだろう。

平成30年3月

総合政策学部紀要編集委員 萩川 信弘・王 元

総合政策論集 第17巻第1号(通巻19号)

2018年3月20日発行

発行 東北文化学園大学総合政策学部
〒981-8551 仙台市青葉区国見6-45-1
TEL:022(233)3310(代表) FAX:022(233)6419

編集 『総合政策論集』編集委員会
嵯川信弘・王元

印刷・製本 今野印刷株式会社
